

ドグマティズムと自己および他者認知との関係について

善 明 宣 夫

問 題

マスコミの報道によれば、昨年9月11日の同時多発テロの発生後、アメリカにおいて愛国心の異常な高揚、テロ組織に対する報復攻撃への賛同、さらにはそうした施策を強行に押し進めようとするブッシュ政権への支持率の高騰が報告されている。また、そうしたテロ組織とは関連のないアメリカ在住のアラブ系住民やイスラム教徒への民間人によるいわれのない攻撃行動の報告も散見される。こうした特異な状況に触発された権威への無批判的な同調、敵対者への厳しい報復の容認や報復行動への積極的加担といった個人的傾向については、これまでに Fromm (1941)、Adorno ら (1950) や Rokeach (1960) らによって研究がなされてきた。Fromm は、われわれが近代社会において獲得した自由の重荷という問題を基調に、権威への服従と弱者への支配という両面的傾向を特徴とするのタイプをサド・マゾヒズムの性格あるいは権威主義的性格と呼び、こうした社会的性格をもとにナチズム台頭の社会・心理的過程について理論的分析を行っている。

また、Adorno らは1944年から数年にわたる大がかりな調査を実施し、ユダヤ人に対する人種的偏見について研究を行った。ここでの研究の焦点は人種的偏見と敵意の問題であったが、最終的には、そうした社会的態度の基底には潜在的なファシストや非民主主義のプロパガンダに影響を受けやすい人に共通する特定のパーソナリティが見いだされたとし、これを権威主義的パーソナリティ (authoritarian personality) と呼んでいる。権威主義者は社会的地位や成功への関心が強く、序列が明確に構造化された社会的関係を好み、理想化された権威に服従的な態度を示すと同時に、自分の信じる権威や因習的な価値に背く集団や個人を非難、排斥し、場合によっては処罰しようとする傾向が強くみられるとされる。

Fromm と Adorno らの権威主義的パーソナリティ研究は、社会的性格と個人的性格、また理論的研究と実証的研究という違いはあるにせよ、いずれも精神分析をその理論的背景とするものであり、孤立感、無力感の補償や反動形成、攻撃対象の置き換えや投影による攻撃行動の正当化といった自我の防衛機制がそうした特徴を説明、解釈する際に中心的概念として援用されている。右翼、左翼といった政治的スタンスから自由な、より一般化さ

れた権威主義を示すドグマティズムという概念にもこうした考え方は受け継がれており、Rokeach (1960) は「閉ざされた認知システム (ドグマティズム) とは、そうした認知システムを構成することにより、傷つきやすい心を防御するように意図された精神分析における防衛機制の全体的ネットワークにすぎない」とし、信念、非信念の内容や構造的関係をもとにそうした特徴についての理論的考察を行っている。

Rokeach は、宣言的知識で構成される個人の認知システムを5層3領域からなる信念システムとしてとらえているが、その中核となる自己や権威についての信念に関して、ドグマティストには「われわれは寄辺のない世界で孤立しており無力である。また世界は不確実で、これから先どうなるか分からない。自分は基本的には価値のない人間であり、この寄辺のない世界に一人で立ち向かうには不適切な人間である。そして、こうした感情に打ち勝つ方法は自己の誇大化や正当化が可能であるような主義主張に同一化し、権力や地位を得ることであり、さらにそうした主義主張の正当性について繰り返し確認していくことである」といった内容的特徴がみられるとしている。所謂、権威主義者やドグマティストには自己価値についての不信が根本にあり、そうした不適合感や無力感の補償や反動形成として自己の誇大化や正当化が可能であるような権威への同一化 (積極的加担や受容) がみられるとするのである。

このように、Fromm から Adorno らを経て Rokeach に至る一連の研究を概観すると、権威主義やドグマティズムについて実証的に概念規定を行っていくうえで、権威主義者やドグマティストの抱く自己概念のあり方がまずは検討を要する中心的課題であることが理解される。仮説として、ドグマティストには自己の不適合感や無力感に根ざした否定的な自己概念が持たれていることが予想されるが、実際にはごくわずかの自己評価項目で仮説との一致がみられたものの、全般的には仮説を裏づけるような結果は得られなかった (善明, 1993)。しかし、前回の調査では男性のみが調査対象であったこと、また青年期の自己概念について検討する際には、特にそのネガティブな側面を考慮することの重要性が指摘されている (遠藤, 1993) が、評価対象が「現実自己」と「理想自己」の2つの側面に限られており自己の否定的な側面についての情報に欠けること、さらには権威主義者やド

グマティストの特徴として他者への不寛容さがあげられていることから、自己評価のみならず他者評価という観点にも注目する必要があること等の問題点が指摘される。そこで、本研究は「現実自己」「理想自己」ばかりでなく、自己の否定的な側面の評価および他者評価という観点を加えることにより、ドグマティストにみられる自己認知、他者認知の在り方について総合的に検討し直すことを目的とする。また、「理想自己」と「現実自己」の不一致度を指標として、そうしたズレの大きさと不適応との関係が示唆されていることから、あわせてドグマティズム傾向の強さと適応との関係についても検討を行うことにする。

方 法

〔調査対象〕

関西の私立大学生及び大学院生178名（男性82名、女性96名）を調査対象者とした。

調査対象者の年齢範囲は18歳から27歳で、平均年齢は男性20.77歳、女性19.32歳であった。

〔調査実施時期〕

2001年10月上旬

〔測定尺度〕

(1)ドグマティズム尺度 (D 尺度)

信念システムの閉鎖性—開放性に関する個人差を捉える測度として Rokeach (1960) によって考案されたもので、最初の A 型 (89項目) から、現在一般に用いられている E 型 (40項目) に至るまで計 4 回の改訂がなされている。尺度の項目はドグマティストに特徴的な自己、他者、権威、世界等に関する信念の内容、またその分化度の極端な差に代表されるような信念、非信念システムの構造的特徴を引き出すように構成されており、Adorno らの F 尺度 (Fascism Scale) とは異なり特定のイデオロギー的立場に偏らないようにも配慮がなされている。尺度への回答は「まったくちがう」から「まったくそうだ」まで項目内容への非同意—同意の程度によって 6 段階（「どちらでもない」「わからない」等の中間評価は含まない）でなされるが、Rokeach のオリジナルなスコアリング手続きでは、非同意の程度によって 1～3 点、同意の程度によって 5～7 点、また未回答の場合には 4 点が割り当てられている。したがって、得点の範囲は 40～280 点ということになる。なお、尺度の信頼性と構成概念妥当性に関しては先行研究において満足のいく結果が得られている (善明, 1989 a, 1989 b)。今回の調査では、近年の世界情勢の変化により、直訳すると不適当と思われる質問項目もみられることから、Rokeach の項目構成の原則から逸脱しない範囲で項目内容に若干の修正を加えた。

(2)セルフ・ディファレンシャル尺度 (SD 尺度)

長島、藤原、原野、斉藤、堀 (1966, 1967) によって自己概念を操作的、客観的に捉える測度として開発されたもので、発達段階に応じて中学生用、高校生用、大学生および成人用が考案されている。大学生用の Form A は、「陽気な—陰気な」「慎重な—軽率な」等の 47 の形容詞対で構成され、「とても」「かなり」「やや」「どちらでもない」の 7 段階で評定される。また、長島らの先行研究における因子分析の結果、全分散の 53% を説明するものとして、向性（「外向的な—内向的な」「陽気な—陰気な」等の 9 項目）、情緒安定性（「丸い—角のある」「あたたかい—冷たい」等の 10 項目）、強靱性（「臆病な—勇敢な」「弱々しい—たくましい」等の 10 項目）、誠実性（「誠実な—不誠実な」「まじめな—不真面目な」等の 11 項目）、過敏性（「敏感な—鈍感な」「病弱な—元氣な」等の 4 項目）、理知性（「理知的な—感情的な」「冷静な—情熱的な」等の 5 項目）の 6 因子が抽出されている。

今回の調査では、現実自己、理想自己、嫌悪自己、嫌悪他者の自己に関する 3 側面の評価と 1 つの他者評価について検討するために、「今の（ありのままの）自分」「理想の自分」「最も嫌いな自分」「今最も嫌いな人」という 4 種類の評価対象を設け、それぞれについて SD 尺度に回答を求めた。

また、適応との関係については、「今の（ありのままの）自分」で測定される現実自己と「理想の自分」で測定される理想自己の 2 つの自己像間の差異スコア (discrepancy score; 以下 D スコアと略す) を用いた。なお、D スコアは両自己像間の同一形容詞対における評定の差 d を求め、 $D = \sqrt{\sum d^2}$ によって算出した。

〔実施方法〕

大学での講義時間内に調査への回答依頼、回答方法、留意点などを口頭で述べた後、上記の質問紙を集団施行した。なお、回答の所要時間は約 50 分であった。

結 果

D 尺度得点の性差について検討を行った結果、先行研究 (善明, 1989 a) と同様に男子学生 ($M=154.94$, $SD=20.19$) と女子学生 ($M=150.58$, $SD=22.12$) とに有意差はみられなかった ($t=1.36$ $df=176$ $n.s.$)。そこで、男女を一緒にした全体の D 尺度得点の中央値 ($Me=154$) をもとに、低ドグマティズム群 (88 名; 以下、L-D 群と略す) と高ドグマティズム群 (90 名; 以下、H-D 群と略す) との 2 群に分け、両群間で各 SD 尺度項目得点の平均の差の検定を行った。L-D 群と H-D 群の各評価項目の平均と標準偏差を、現実自己と理想自己については Tabel 1 に、嫌悪自己と嫌悪他者については Table 2 に示してある。

Table 1 ドグマティズム高・低得点群のSD尺度（実現自己・理想自己）の平均得点

	現実自己		理想自己	
	L-D群	H-D群	L-D群	H-D群
Q01 鈍感な－敏感な	4.17 (1.58)	4.39 (1.54)	4.99 (1.25)	5.20 (1.45)
Q02 短気な－気長な	4.18 (1.55)	3.94 (1.54)	5.70 (1.12)	5.87 (1.00)
Q03 強い－弱い	4.18 (1.39)	4.60 (1.45)	2.19 (1.00)	1.90 (0.91)*
Q04 陽気な－陰気な	3.08 (1.41)	3.40 (1.44)	2.17 (1.07)	1.81 (0.83)*
Q05 物覚えのよい－忘れっぽい	4.02 (1.64)	3.88 (1.55)	1.91 (1.07)	1.76 (1.09)
Q06 不正確な－正確な	4.30 (1.36)	4.42 (1.34)	6.00 (0.96)	6.07 (0.96)
Q07 勤勉な－怠惰な	3.95 (1.42)	3.78 (1.55)	2.41 (0.95)	1.98 (0.98)**
Q08 感情的な－理性的な	3.86 (1.59)	3.62 (1.69)	4.61 (1.57)	4.58 (1.47)
Q09 派手な－地味な	4.45 (1.23)	4.49 (1.17)	3.77 (0.92)	3.50 (0.97)
Q10 厳しい－やさしい	4.67 (1.19)	4.71 (1.33)	5.39 (1.46)	5.33 (1.66)
Q11 感覚的な－理知的な	3.49 (1.39)	3.47 (1.38)	4.60 (1.46)	4.51 (1.58)
Q12 強気な－弱気な	4.02 (1.47)	4.14 (1.31)	2.77 (0.99)	2.54 (0.91)
Q13 孤独な－社交的な	4.32 (1.49)	4.10 (1.65)	5.69 (1.24)	5.87 (1.16)
Q14 無口な－おしゃべりな	4.60 (1.53)	4.74 (1.62)	5.02 (1.25)	5.30 (1.16)
Q15 まじめな－ふまじめな	3.13 (1.48)	3.00 (1.41)	2.43 (1.08)	2.52 (1.32)
Q16 かたい－やわらかい	3.76 (1.50)	3.60 (1.41)	5.13 (1.40)	5.59 (1.22)*
Q17 にぎやかな－静かな	3.80 (1.66)	3.53 (1.50)	3.15 (1.45)	2.77 (1.29)
Q18 角のある－丸い	4.55 (1.41)	4.16 (1.48)	5.67 (1.17)	5.78 (1.13)
Q19 素直な－強情な	3.81 (1.46)	3.51 (1.64)	2.07 (1.21)	1.83 (1.00)
Q20 臆病な－勇敢な	3.55 (1.34)	3.42 (1.38)	5.85 (1.01)	6.08 (0.90)
Q21 頼りない－頼もしい	3.57 (1.52)	3.77 (1.54)	5.97 (1.02)	6.40 (0.85)**
Q22 不誠実な－誠実な	5.16 (1.11)	5.12 (1.36)	6.34 (0.88)	6.42 (0.89)
Q23 親切な－いじわるな	3.00 (0.98)	3.18 (1.18)	1.68 (0.93)	1.62 (0.92)
Q24 無責任な－責任感のある	4.77 (1.54)	5.03 (1.59)	6.34 (0.87)	6.52 (0.77)
Q25 無能な－有能な	4.13 (1.00)	4.16 (1.21)	6.40 (0.86)	6.49 (0.72)
Q26 消極的な－積極的な	4.15 (1.47)	3.94 (1.49)	5.93 (0.94)	6.13 (0.84)
Q27 信じやすい－懐疑的な	3.50 (1.63)	3.58 (1.83)	3.86 (1.22)	3.92 (1.21)
Q28 外向的な－内向的な	3.61 (1.57)	3.97 (1.48)	2.69 (1.26)	2.34 (1.06)*
Q29 ひかえめな－でしゃばりな	3.91 (1.26)	3.67 (1.39)	3.69 (0.85)	3.83 (0.97)
Q30 不安定な－安定した	3.91 (1.53)	3.51 (1.58)	6.14 (0.87)	6.21 (1.00)
Q31 小心な－大胆な	3.63 (1.46)	3.44 (1.38)	5.07 (0.98)	5.23 (0.94)
Q32 おだやかな－激しい	3.34 (1.34)	3.41 (1.54)	2.69 (1.32)	2.79 (1.45)
Q33 個性のない－个性的な	4.65 (1.32)	4.61 (1.40)	5.84 (0.88)	5.88 (1.03)
Q34 大人っぽい－子供っぽい	4.25 (1.50)	4.38 (1.67)	3.08 (1.20)	2.78 (1.30)
Q35 冷静な－情熱的な	3.90 (1.47)	3.74 (1.52)	3.66 (1.64)	3.79 (1.72)
Q36 内面的な－外面的な	3.84 (1.26)	3.51 (1.27)	4.19 (1.32)	4.39 (1.52)
Q37 不潔な－清潔な	4.86 (1.15)	4.92 (1.32)	6.31 (0.90)	6.39 (0.80)
Q38 あたたかい－冷たい	3.45 (1.21)	3.39 (1.40)	2.07 (1.24)	1.82 (1.03)
Q39 慎重な－軽率な	3.28 (1.53)	3.06 (1.34)	2.52 (1.09)	2.32 (1.05)
Q40 きちんとした－だらしない	3.69 (1.56)	3.43 (1.51)	2.02 (1.08)	1.70 (0.83)*
Q41 不注意な－注意深い	3.97 (1.50)	4.20 (1.61)	5.50 (0.92)	5.73 (0.91)
Q42 開放的な－閉鎖的な	3.40 (1.47)	3.73 (1.56)	2.35 (1.04)	2.28 (0.89)
Q43 元気な－病弱な	2.53 (1.22)	2.51 (1.25)	1.68 (0.85)	1.41 (0.69)*
Q44 無気力な－意欲的な	4.78 (1.35)	4.60 (1.48)	6.24 (0.93)	6.53 (0.64)*
Q45 たくましい－弱々しい	3.44 (1.31)	3.59 (1.20)	2.17 (1.00)	1.79 (0.93)**
Q46 自分勝手な－思いやりのある	4.35 (1.55)	4.28 (1.66)	6.27 (1.11)	6.38 (1.04)
Q47 気持ちよい－気持ち悪い	3.20 (1.20)	3.41 (1.37)	1.70 (0.94)	1.53 (0.81)

()内は標準偏差

** $p<.01$ * $p<.05$

Table 2 ドグマティズム高・低得点群のSD尺度(嫌悪自己・嫌悪他者)の平均得点

	嫌悪自己		嫌悪他者	
	L-D群	H-D群	L-D群	H-D群
Q01 鈍感な-敏感な	3.25(2.06)	3.44(2.32)	2.90(2.08)	2.92(2.25)
Q02 短気な-気長な	1.88(0.94)	1.94(1.43)	1.99(1.36)	1.77(1.39)
Q03 強い-弱い	5.78(1.51)	6.10(1.34)	4.03(1.98)	4.10(2.37)
Q04 陽気な-陰気な	5.80(1.37)	6.20(1.11)*	4.66(1.92)	5.37(1.96)*
Q05 物覚えのよい-忘れっぽい	5.47(1.39)	5.70(1.47)	4.88(1.77)	5.28(2.05)
Q06 不正確な-正確な	2.32(1.16)	2.07(1.31)	2.60(1.69)	2.23(1.71)
Q07 勤勉な-怠惰な	5.92(1.32)	6.29(1.24)	5.19(1.90)	5.44(2.09)
Q08 感情的な-理性的な	2.73(1.56)	2.65(1.87)	3.05(1.95)	3.26(2.20)
Q09 派手な-地味な	4.63(1.87)	5.03(1.95)	3.19(1.79)	3.43(2.17)
Q10 厳しい-やさしい	2.81(1.45)	2.74(1.63)	2.73(1.28)	2.11(1.28)**
Q11 感覚的な-理知的な	3.53(1.66)	3.49(1.90)	3.68(1.85)	3.99(2.07)
Q12 強気な-弱気な	5.81(1.62)	6.08(1.60)	3.43(2.13)	3.74(2.38)
Q13 孤独な-社交的な	2.14(1.37)	2.02(1.51)	3.93(1.89)	3.42(2.20)
Q14 無口な-おしゃべりな	2.93(2.12)	2.67(2.09)	4.76(2.06)	3.83(2.39)**
Q15 まじめな-ふまじめな	5.07(1.95)	5.33(2.08)	5.24(1.89)	5.63(1.95)
Q16 かたい-やわらかい	2.50(1.52)	2.25(1.60)	2.92(1.69)	2.53(1.84)
Q17 にぎやかな-静かな	4.32(1.80)	5.39(1.81)***	3.53(1.86)	3.81(2.01)
Q18 角のある-丸い	2.24(1.35)	2.02(1.58)	2.14(1.37)	1.93(1.31)
Q19 素直な-強情な	6.08(1.04)	6.02(1.32)	5.72(1.41)	6.06(1.32)
Q20 臆病な-勇敢な	2.03(1.25)	1.69(1.15)	2.94(1.55)	2.86(1.79)
Q21 頼りない-頼もしい	1.92(1.07)	1.71(1.06)	2.50(1.45)	2.54(1.69)
Q22 不誠実な-誠実な	2.22(1.29)	2.13(1.27)	1.91(1.22)	1.98(1.43)
Q23 親切な-いじわるな	5.82(1.22)	6.15(1.18)	6.10(1.28)	6.24(1.34)
Q24 無責任な-責任感のある	2.19(1.39)	1.87(1.27)	1.97(1.37)	1.91(1.54)
Q25 無能な-有能な	1.97(1.26)	1.56(0.88)*	3.06(1.70)	2.92(1.78)
Q26 消極的な-積極的な	2.00(1.19)	1.65(1.10)*	3.68(2.07)	3.36(2.24)
Q27 信じやすい-懐疑的な	4.68(2.04)	4.65(2.39)	5.24(1.52)	5.64(1.74)
Q28 外向的な-内向的な	5.56(1.45)	6.09(1.28)*	4.07(1.95)	4.50(2.11)
Q29 ひかえめな-でしゃばりな	4.51(2.15)	4.22(2.31)	5.78(1.39)	5.66(1.72)
Q30 不安定な-安定した	1.94(1.18)	1.80(1.26)	3.02(1.53)	2.51(1.60)*
Q31 小心な-大胆な	2.14(1.27)	1.90(1.31)	3.63(1.77)	3.64(2.12)
Q32 おだやかな-激しい	5.30(1.32)	5.39(1.37)	5.42(1.33)	5.61(1.55)
Q33 個性のない-個性的な	2.52(1.71)	2.16(1.48)	3.63(1.88)	3.58(2.18)
Q34 大人っぽい-子供っぽい	5.27(1.73)	5.16(1.88)	4.86(1.57)	4.96(2.02)
Q35 冷静な-情熱的な	4.20(1.68)	4.00(1.87)	4.18(1.51)	3.91(1.89)
Q36 内面的な-外面的な	3.42(1.79)	3.52(2.10)	4.49(1.73)	4.23(2.18)
Q37 不潔な-清潔な	2.57(1.45)	2.25(1.38)	2.66(1.56)	2.39(1.80)
Q38 あたたかい-冷たい	5.88(1.13)	6.04(1.21)	5.53(1.29)	6.22(1.16)***
Q39 慎重な-軽率な	5.67(1.60)	5.87(1.62)	5.44(1.58)	5.84(1.68)
Q40 きちんとした-だらしない	5.80(1.43)	5.92(1.45)	5.10(1.84)	5.71(1.77)*
Q41 不注意な-注意深い	2.25(1.28)	2.03(1.44)	3.17(1.85)	2.77(1.97)
Q42 開放的な-閉鎖的な	5.51(1.48)	5.94(1.39)*	4.68(1.71)	5.17(1.96)
Q43 元気な-病弱な	5.20(1.49)	5.82(1.26)**	4.05(1.59)	4.60(1.88)*
Q44 無気力な-意欲的な	2.08(1.22)	1.71(1.06)*	3.05(1.73)	2.60(1.88)
Q45 たくましい-弱々しい	5.81(1.25)	6.08(1.21)	4.57(1.68)	4.97(1.90)
Q46 自分勝手な-思いやりのある	2.02(1.12)	1.80(1.25)	1.50(0.86)	1.38(1.03)
Q47 気持ちよい-気持ち悪い	5.68(1.25)	5.85(1.36)	5.93(1.28)	6.08(1.24)

()内は標準偏差

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

現実自己では、「強い—弱い」($t=1.96$ $df=176$ $p<.1$)、「角のある—丸い」($t=1.80$ $df=176$ $p<.1$)、「不安定な—安定した」($t=1.71$ $df=176$ $p<.1$)、「内面的な—外面的な」($t=1.74$ $df=176$ $p<.1$)に有意傾向は認められたものの、どの評価項目においても有意差はみられなかった。理想自己では、「強い—弱い」($t=2.04$ $df=176$ $p<.05$)、「陽気な—陰気な」($t=2.49$ $df=163$ $p<.05$)、「勤勉な—怠惰な」($t=2.97$ $df=176$ $p<.01$)、「かたい—やわらかい」($t=2.37$ $df=176$ $p<.05$)、「頼りない—頼もしい」($t=3.09$ $df=176$ $p<.01$)、「外向的な—内向的な」($t=2.00$ $df=176$ $p<.05$)、「きちんとした—だらしない」($t=2.24$ $df=176$ $p<.05$)、「元気な—病弱な」($t=2.33$ $df=166$ $p<.05$)、「無気力な—意欲的な」($t=2.45$ $df=153$ $p<.05$)、「たくましい—弱々しい」($t=2.64$ $df=176$ $p<.01$)の10の評価項目において有意差がみられ、H-D群はL-D群にくらべ、より強く、陽気で、勤勉で、やわらかく、頼もしく、外向的で、きちんとした、元気で、意欲的で、たくましくありたいと望んでいるという結果であった。

また、嫌悪自己では「陽気な—陰気な」($t=2.18$ $df=175$ $p<.05$)、「にぎやかな—静かな」($t=3.96$ $df=175$ $p<.001$)、「無能な—有能な」($t=2.47$ $df=155$ $p<.05$)、「消極的な—積極的な」($t=2.02$ $df=175$ $p<.05$)、「外向的な—内向的な」($t=2.59$ $df=175$ $p<.05$)、「開放的な—閉鎖的な」($t=2.00$ $df=174$ $p<.05$)、「元気な—病弱な」($t=2.98$ $df=175$ $p<.01$)、「無気力な—意欲的な」($t=2.17$ $df=175$ $p<.05$)の8の評価項目において有意差がみられ、H-D群はL-D群にくらべ、最も嫌いな自分はより陰気で、静かで、無能で、消極的で、内向的で、閉鎖的で、病弱で、無気力であると評価していた。

さらに、嫌悪他者では「陽気な—陰気な」($t=2.43$ $df=176$ $p<.05$)、「厳しい—やさしい」($t=3.21$ $df=176$ $p<.01$)、「無口な—おしゃべりな」($t=2.78$ $df=173$ $p<.01$)、「不安定な—安定した」($t=2.18$ $df=176$ $p<.05$)、「あたたかい—冷たい」($t=3.75$ $df=176$ $p<.001$)、「きちんとした—だらしない」($t=2.25$ $df=176$ $p<.05$)、「元気な—病弱な」($t=2.13$ $df=172$ $p<.05$)の7の評価項目において有意差がみられ、H-D群はL-D群にくらべ、今最も嫌いな他者をより陰気で、厳しく、無口で、不安定で、冷たく、だらしく、病弱であると評価しているという結果であった。

つぎに、こうした3つの自己評価と1つの他者評価の結果を整理する意味で、各評価項目を長島ら(1967)が抽出した因子別に合算し、ドグマティズムの高・低得点群間でその平均値の差の検定を行った結果がTable 3に示してある。評価項目別の結果と同様、現実自己では

いずれの因子においても有意差はみられなかったが、理想自己では向性因子($t=2.29$ $df=176$ $p<.05$)と強靱性($t=2.89$ $df=161$ $p<.01$)因子において有意差がみられ、H-D群はL-D群にくらべ、「内向的な—外向的な」に代表される向性次元において、より外向的として特徴づけられるような方向でありたいと望んでおり、「臆病な—勇敢な」に代表される強靱性次元において、より強靱で意欲的でありたいと望んでいた。

Table 3 ドグマティズム高・低群の因子別自己・他者評価の平均得点

		ドグマティズム	
		低 群	高 群
現実自己	向 性	38.33(10.32)	36.90(9.61)
	情緒安定性	44.71(8.15)	43.79(9.25)
	強 靱 性	40.80(9.89)	39.61(9.08)
	誠 実 性	49.15(11.15)	50.94(10.09)
	過 敏 性	14.30(3.33)	14.97(3.43)
	理 知 性	19.92(5.53)	19.91(5.43)
理想自己	向 性	44.47(7.29)	46.69(5.60)*
	情緒安定性	57.94(7.28)	59.34(6.61)
	強 靱 性	58.16(6.12)	60.51(4.62)**
	誠 実 性	64.18(6.70)	66.06(6.16)
	過 敏 性	12.40(2.29)	12.32(2.37)
	理 知 性	23.96(4.99)	24.20(4.85)
嫌悪自己	向 性	27.19(9.48)	23.78(8.31)*
	情緒安定性	22.69(7.46)	21.29(8.13)
	強 靱 性	21.26(8.73)	18.11(6.45)**
	誠 実 性	26.88(10.64)	24.69(10.00)
	過 敏 性	19.19(3.57)	20.11(4.44)
	理 知 性	15.11(5.02)	15.12(5.64)
嫌悪他者	向 性	38.83(11.69)	34.87(13.06)*
	情緒安定性	22.57(7.42)	19.51(7.55)**
	強 靱 性	34.44(11.72)	32.69(13.91)
	誠 実 性	29.35(12.62)	26.29(13.31)
	過 敏 性	17.16(3.55)	18.66(4.38)*
	理 知 性	16.24(5.46)	16.53(6.69)

()内は標準偏差

** $p<.01$ * $p<.05$

また、嫌悪自己でも理想自己と同様に向性因子($t=2.55$ $df=175$ $p<.05$)と強靱性因子($t=2.73$ $df=160$ $p<.01$)において有意差がみられ、H-D群はL-D群にくらべ、もっとも嫌いな自分は、より内向的で、弱々しく意欲に欠けると評価していた。さらに、嫌悪他者では向性($t=2.13$ $df=176$ $p<.05$)、情緒安定性($t=2.72$ $df=176$ $p<.01$)、過敏性($t=2.50$ $df=176$ $p<.05$)因子において有意差がみられ、今最も嫌いな他者は、より内向的で、情緒的に不安定で、過敏であると評価しているという結果であった。

Dスコアを指標としたドグマティズムと適応との関係については、L-D群($M=71.06$ $SD=25.22$)とH-D群($M=84.72$ $SD=30.75$)とに有意差がみられ、

H-D 群は L-D 群にくらべ理想自己と現実自己の不一致度がより大きいという結果がみられた ($t=3.25$ $df=170$ $p<.001$)。また補足的に、自己の最も否定的な側面と現実の自分との関係についてみたところ、L-D 群 ($M=107.17$ $SD=38.02$) と H-D 群 ($M=117.71$ $SD=32.34$) とに有意差がみられ、嫌悪自己と現実自己の不一致度についても、H-D 群は L-D 群にくらべより大きいという結果であった ($t=1.99$ $df=175$ $p<.05$)。

考 察

今回の調査では、ドグマティストの自己認知および他者認知のあり方について検討するために「今の(ありのままの)自分」「理想とする自分」「最も嫌いな自分」と「今最も嫌いな人」という3つの自己に関する評価と1つの他者評価を評価対象として設けた。前回の調査とは異なり、嫌悪自己に関しての評価を加えた理由は、既述のように青年期の自己について検討する際には、特にそのネガティブな側面に注目することが重要であるとの指摘が多くなされているからである。自己概念に関するこれまでの研究によれば、青年期では自己のネガティブな面についての記述が多くみられ(山田, 1981)、女子の場合は特に性格や容姿のネガティブな面への関心がより強いことが報告されている(宮沢, 1988)。また自尊感情(self-esteem)との関係においても、従来の自己のポジティブな面を肯定する積極的自己肯定ばかりでなく、自己のネガティブな面を否定する消極的自己肯定が自尊感情の高さにつながることが指摘されている(遠藤, 1992 a)。

自己評価結果から、現実自己ではいずれの項目においてもドグマティズム高・低群間に有意差はみられなかったが、理想自己と嫌悪自己ではともに向性因子と強靱性因子において有意差がみられ、高ドグマティズム群は低ドグマティズム群にくらべ、嫌悪する自分はより内向的で、弱々しく意欲に欠けているが、こうありたい、あるいはこうあらねばならないとする理想の自分ではより外向的で、強靱で意欲的でありたいと望んでいた。

ここで、理想とする最も好ましい自己像と嫌悪する最も好ましくないとされる自己像との間で、向性と強靱性という2つの自己の側面がともにネガ・ポジの関係として評価されているという結果は興味深い。より一般化された権威主義を示すドグマティズムは、自己に関する諸側面のうち、特に「外向的な—内向的な」「おしゃべりな—無口な」「にぎやかな—静かな」「外面的な—内面的な」「陽気な—陰気な」「社交的な—孤独な」「開放的な—閉鎖的な」「派手な—地味な」「でしゃばりな—ひかえめな」の9の評価項目で構成される向性と、「臆病な—勇敢な」「弱々しい—たくましい」「無気力な—意欲的

な」「弱気な—強気な」「消極的な—積極的な」「頼りない—頼もしい」「小心な—大胆な」「弱い—強い」「個性的でない—個性的な」「無能な—有能な」の10項目からなる強靱性にと結びつきがみられ、高ドグマティズム群は低ドグマティズム群にくらべ、否定的な自己では両側面ともによりネガティブな方向での評価の強調が、逆に理想とする自己ではよりポジティブな方向での評価の強調がみられた。このことから、自己に関する諸側面のなかで、特に向性と強靱性がドグマティズム傾向によって特徴づけられる主要な評価次元であり、ドグマティズム傾向の強い青年では嫌悪自己と理想自己間で両側面がともに対極的關係としてとらえられていることが理解される。既述のように、ドグマティストの自己観や世界観を反映した中心的信念の特徴として、孤立感や無力感によって示される自己価値への不信がみられることが指摘されている(Rokeach, 1960)。また、権威主義者に関する記述において、Frenkel-Brunswick (1950) は「環境におけるさまざまな脅威についての強迫観念は、自明なこととして、強者でありたいとする願望を必然化する」と述べ、強さや力への指向性をその特徴としてあげている。今回の調査では、こうした孤立感や無力感が高ドグマティズム群の嫌悪自己における向性面と強靱性面での自己評価の低さ、あるいは厳しさとして表現され、さらにそうした否定的な自己観の補償や反動形成として、理想自己における両側面の逆方向での強調がみられたものと考えられる。

ここで問題となるのが、前回の調査と同様に、高・低ドグマティズム群間で現実自己のとらえ方に何ら違いがみられなかったという点である。既述のように、理想自己と嫌悪自己では両群間に Rokeach の理論と整合するような方向での違いがみられたが、現実自己ではそうした特徴はみられなかった。現実自己が今のありのままの自分であるのに対して、理想自己、嫌悪自己が理想の自分と最も嫌悪する自分であることから、評定に際しての情動あるいは感情的負荷という面で違いがみられることが予想される。あくまでも推測の域を出ないが、自己の諸側面の評価に関して、ドグマティズム傾向は「理想の」「最も嫌いな」といったより強く情動が喚起されるような刺激に対して顕在化されやすく、そうでない一般的な刺激に対しては顕在化されにくいのかかもしれない。こうした刺激特性との関係は、Ehrlich & Lee (1969) が指摘する媒介変数としての自我関与の問題を含め、今後検討を要する重要な課題である。

また、他者評価に関してはドグマティズム高・低群間で向性因子、情緒安定性因子と過敏性因子において有意差がみられ、高ドグマティズム群は嫌悪する他者をより内向的で、情緒的に不安定で、過敏であると評価していた。Rokeach (1960) はドグマティズムに関する一般

的定義のなかで他者に対する不寛容さをその特徴のひとつとしてあげているが、こうした面での嫌悪他者へのより厳しい評価は他者に対する認知面での不寛容さを示すものといえる。

つぎに、Dスコアでは高ドグマティズム群は低ドグマティズム群にくらべ、理想自己と現実自己の不一致度がより大きかった。Rogers (1954) が初めて理想自己と現実自己とのズレの問題と適応との関係について言及して以来、Dスコアは適応指標として多くの研究で用いられてきた。こうしたことから、高ドグマティズム群は低ドグマティズム群にくらべ適応水準がより低いということができよう。しかし、Dスコアを用いた研究を再検討した結果、両者には一貫した関連がみられないとする報告もなされている(遠藤, 1991)。また、Rogersの対象とした不適応群とその後の研究で対象とされた適応群とでは、どちらの自己が土台となってもう片方の自己を規定するかといった意味での力動的関係が異なると考えられることから、単に両自己間の不一致度を指標として適応の問題を論じることには否定的な見解も提出されている(溝上, 1999)。さらに、Dスコアと自尊感情との関係についても結果は不安定であり、その原因として、個人が重要視する自己の側面が考慮されていないという指摘もみられる(Moretti & Higgins, 1990)。こうした見解からすれば、今回の結果から性急に高ドグマティズム群は低ドグマティズム群にくらべ適応水準が低いと結論づけることには問題も残る。ただし、適応との関係についての考察は一時保留したとしても、現実自己において両群間に差がみられなかったことから、少なくとも高ドグマティズム群のほうが全般的により高い理想像を設定しており、ポジティブな方向への自己像の振れ幅がより大きいということはある。

また補足的にはあるが、嫌悪自己と現実自己のDスコアを算出した結果、高ドグマティズム群は低ドグマティズム群にくらべ、嫌悪自己と現実自己との不一致度がより大きかった。これまでに、嫌悪自己という自己のネガティブな側面と現実自己とのズレの問題と適応との関係についての研究はみられず、こうした不一致度を指標として適応について論じることには無理があるが、それでも高ドグマティズム群のほうが全般的に否定的な自己をより厳しく評価しており、ネガティブな方向への自己像の振れ幅がより大きいということできよう。こうした結果から、ドグマティズム傾向の強い青年はプラス・マイナスの両極へと振れやすい、より不安定な自己像を持つことが示唆がされる。

最後に、高ドグマティズム群にみられる向性と強靱性の否定的、肯定的自己間での対極的な認知、他者評価の厳しさ、両極に振れやすい不安定な自己像といった特徴は、ドグマティストの中心的信念に関する Rokeach の

仮説を支持するものといえる。また、現実自己では顕著な違いがみられなかったことから、ドグマティズムという特性は情動の喚起されやすい状況下で発動されやすく、そうでない一般的な状況下では表面化されにくいであろう。ドグマティズム研究全般について指摘される結果の不安定性 (Goldstein & Blackman, 1978) には、こうした問題が関与しているものと考えられる。

要 約

本研究は、権威主義者やドグマティストにみられる自己認知および他者認知のあり方について検討することを目的として実施された。自己認知に関しては、現実自己ばかりでなく嫌悪自己と理想自己という2つの側面を加えるとともに、他者認知に関しては嫌悪他者という評価対象を設定した。結果として、ドグマティズム高・低群間で現実自己のとらえ方に違いはみられなかったが、嫌悪自己と理想自己では向性因子と強靱性因子において有意差がみられ、高ドグマティズム群は低ドグマティズム群にくらべ、嫌悪をする自分はより内向的で、弱々しく意欲に欠けているが、こうありたい、あるいはこうあらねばならない理想の自分ではより外向的で、強靱で意欲的でありたいと望んでいた。また、嫌悪他者に関しては向性因子、情緒安定性因子と過敏性因子において有意差がみられ、高ドグマティズム群は低ドグマティズム群にくらべ、嫌悪する他者をより内向的で、情緒的に不安定で、過敏であると評価しており、権威主義者やドグマティストの特徴とされる他者への不寛容さの一端が示された。

さらに、理想自己と現実自己および嫌悪自己と現実自己間のDスコアに関して、高ドグマティズム群は低ドグマティズム群にくらべ、いずれにおいても不一致度がより大きいという結果から、ドグマティズム傾向の強い青年はプラス・マイナスの両極に振れやすい不安定な自己像を持つことが示唆された。こうした、高ドグマティズム群にみられる向性と強靱性の否定的、肯定的自己間での対極的な認知、他者評価の厳しさ、両極に振れやすい不安定な自己像といった特徴は、ドグマティストの中心的信念に関する Rokeach の仮説を裏づけるものと考えられる。

【引用文献】

- Adorno, T.W., Frenkel-Brunswick, E., Levinson, D.J., & Sanford, R.N. 1950 *The authoritarian personality*. New York : Harper & Row. (田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳 1980 権威主義的パーソナリティ 青木書店)

- Ehrlich, H.J., & Lee, D. 1969 Dogmatism, learning and resistance to change : A review and a new paradigm. *Psychological Bulletin*, 71, 249-260.
- 遠藤由美 1991 理想自己に関する最近の研究動向 — 自己概念と適応との関連で — 上越教育大学研究紀要, 10, 19-36.
- 遠藤由美 1992a 自己認知と自己評価の関係 — 重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討 — 教育心理学研究, 40, 157-163.
- 遠藤由美・西芳弘 1993 青年前期における自己評価の研究 — 認知された自己の諸領域との関係 — 上越教育大学研究紀要, 13, 111-120.
- Fromm, E. 1941 *Escape from freedom*. New York : Farrar & Rinehart. (日高六郎訳 1951 自由からの逃走 東京創元社)
- Goldstein, K.M., & Blackman, S. 1978 *Cognitive style : Five approaches and relevant research*. John Wiley & Sons. (島津一夫・水口禮治訳 1982 認知スタイル 誠信書房)
- 宮沢秀次 1988 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, 36, 258-263.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論 — 実証的心理学のパラダイム — 金子書房
- Moretti, M.M., & Higgins, E.T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem : The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108-123.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀洋通 1966 自我と適応の関係についての研究 (1) — Self-Differential 作製の試み — 東京教育大学教育学部紀要, 12, 85-106.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀洋通 1967 自我と適応の関係についての研究 (2) — Self-Differential の作製 — 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-83.
- Rogers, C.R., & Dymond, R.F. (Eds.) 1954 *Psychotherapy and personality change : Coordinated research studies in the client-centered approach*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Rokeach, M. 1960 *The open and closed mind*. New York : Basic Books.
- 山田ゆかり 1981 青年期における自己概念 (I) 日本教育心理学会第 23 回大会発表論文集, 422-423.
- 善明宣夫 1989a 独断主義的認知スタイルに関する研究 — その概念と独断主義尺度の構成、及び信頼性の検討 — 関西学院大学文学部教育学科研究年報, 15, 1-9.
- 善明宣夫 1989b 独断主義に関する心理学的研究 関西学院大学人文論究, 39, 57-69.
- 善明宣夫 1993 ドグマティズムと自己概念および適応水準 関西学院大学臨床教育心理学研究, 18, 19, 1-6.
- (ぜんみょう のぼお・関西学院大学助教授)